

はむ事かなはずば、いかなるふちにも身をこそなげめ、などてか異人にはまみへん、それさもな
くば、よろづみづからにまかせ給ふて、心やすく養生あれかしといへば、野口泪をおさへ、此うへ
ばともかくも心にまかせ給へといへば、女もよろこびいよ／＼いたはり、おこたる事なかりけ
り、とかふして野口十とせばかりやみて、つゝにその分野あきまにて死にければ、ふかくなげ、どもせ
んなく、定る野邊のけぶりとなし、夫のために三年がうちおなじいほりにこもり居て、夫の事を
なげきつゝ、其身もつゝに身まかりしとなり、

〔比賣鑑紀行入〕いつの比なりけん、渥美何がしといふもの、妻に永井氏のむすめあり、心ざま貞

順にして、つゝしみふかく、ことばすくなし、父は一城の主なりしかば、おさなきより富貴のわざ
になれそみたり、おとこは祿うすくして、よろづにわびしかりけれども、妻これにたへていさ、
かくるしげなるいろなし、玄かも夫妻の禮うや／＼しき事、まれびとのごとし、十とせばかりを
へてのちに、おとこやまひしてうせぬ、おのこ子一人あり、妻なげきかなしめる事かぎりなし、か
らをはうふり、たまをまつる事、みなその心をつくせり、玄かるに妻の兄あり、そのとしわかくし
て、ひとりはえたふまじきをおもひて、玄ゐて心ざしをうばはんとしけれど、やもめこれに玄た
がはず、兄いかりてなをおして再嫁をなすべしと、一族とともにあひはかりて、事すでにせまり
ぬ、やもめひそかに閨にいり、自害せんとして、すでにかたなをおしたてけるを、めしつかへの女
どもはしりかゝりて、とりとめけるに、血ながれてやまず、兄これにおそれて、二たび縁のさた
いはじとちかひければ、やもめいどうれしげになりていはく、さ思ひ給はんに、などかおさなき
者をすて、みだりに死をいそぎ侍らむやとて、それより子をねやのうちになしなひ、いみじく
をしへぞだてけり、此人もとより出あそぶ事をこのまず、ことにやもめとなりぬる後は、おとこ
の墓おがみより外に、かりにも門を出る事なし、節をまほれる事、大むね此たぐひなり、年いまだ